

WINDS CAFE 296 in 原宿

【光に向かって、、、

林光 生誕 90 年・没後 9 年に寄せて】

2021年 8月 22日

13時 開場

13時 20分 プレコンサート

13時 40分 開演

16時 開場

16時 20分 プレコンサート

16時 40分 開演

うた 富塚研二 ピアノ 伊坪淑子

林光氏の作品、また言葉は、私の目を啓き、行く手を導く、まさに「光」だった。

「音楽にできることは確かに限られている。しかし人の心を動かし、考えを変えるくらいのことではできるのだ」という言葉は、現場に立つとき、幾度も振り返り思い返すことになる。

谷川俊太郎氏が 1965 年 弥生書房『三好達治集』編集の際に記した後書、「全く無用でありながら、私たちの生の不思議にじかに結びついているもの、明暗に等しく内在する微光」

「この微光こそ」「詩の根元に置いていた何かに対応している」とあるのは、三好達治氏の作品ばかりでなく、谷川氏自身の作品に、また林光氏の作品にも見られるものだろう。作品を通じて作者の内面から発せられ、決して消すことのできない「光」。畑中良輔氏が『林光歌曲集』解説で「林光の音楽は、そうして、すべてのひとたちのものとなるのである。」とも書かれている。自分の今回の演奏も「すべてのひとたちのもの」となるための道備えとなるように。

富塚研二

プレコンサート

無伴奏 宮沢賢治詞華集
トーク

「四つの夕暮れの歌」(谷川俊太郎)

「ソング」より

あらしの歌 (山本清多) 『日置野ジャンバラヤ』劇中歌

祈り (宮沢賢治) 『烏の北斗七星』より

サザンクロスのかなたで聞こえた父が息子に与える歌
(廣渡常敏) 『銀河鉄道の夜』劇中歌

出発 (山本清多) オペラ『変身』より

敗戦の子ども (林光)

花のうた (佐藤信)

ものがたり (佐藤信)

わかれ (中野重治)

私は光をにぎっている 讚美歌集『ともにうたおう』より
(山村暮鳥 原詩 松平慎太郎 作詞)

うた (佐藤信)

「四つの夕暮れの歌」(谷川俊太郎) 1959

I II IIIの3篇は谷川の詩集「愛について」、IVは「あなたに」に収められているが、歌曲化にあたり谷川自身によりリライトされている、

I) 「夕暮れは大きな書物だ」曲集の序。世界を俯瞰する視点。古来、郷愁や物思いに耽るときとされる夕べ。人生の様々な場面が思い巡るとき。

II) 不安な前奏で始まる、、、「誰が明かりを消すのだろう」→命の燈火を消すのは誰か。

(『オセロー』5幕冒頭「この明かりを消し、そしてあの命の明かりを消そう」)

III) 最初の和音「現実に、もどる」(畑中更予 談)

「誰もいない隣の部屋で」 主が不在の部屋で聞こえた呼び声、、、

IV) 「死者の迎える夜のために」

前奏→逆復付点、引きずるような重い歩み 葬送 死者への敬意

貧しいもの 今を生きる人々 明日→子供たちへの希望

「ソング」様ざまな機会のために書かれた数々の「うた」。芸術歌曲と異なる、「現場の実践」のためのそれらのうたは、しかしもとの現場を離れてなお、それぞれ独立したメッセージを…「光」を放ち続けている。

作品で最も多いのは劇中歌、またオペラのための歌になる。

あらしの歌 (山本清多)1982年 黒色テント 68/71 公演『日置野ジャンバラヤ』劇中歌。

「あらしの」と題しながら、恐ろしいほど静かな楽曲。歌は四拍子、伴奏は三拍子、うねるような目眩ましい感覚。

出発 (山本清多)1996年 カフカ『変身』に基づくオペラの終曲。物語が終わった「あと」。

「見送りもなく出発する」ユダヤ人一家の運命。また、歴史を振り返る時の「この時、選択を誤らなければ」「あの時、こちらに行っていたら」という思い。そんな諸々の願いや悔恨や人々の行末を全て呑み込むよう轟音で楽曲は終わる。

サザンクロスのかなたで聞こえた父が息子に与える歌 (廣渡常敏) 1982年 東京演劇アンサンブル 廣渡常敏作・演出の『銀河鉄道の夜』劇中歌。旅の終わり、ジョバンニがカンパネラとも別れたが一人残ったところに聞こえてくる。

また各種の集会、講演の機会にも様々な歌が作られてきた。

祈り（宮沢賢治）『鳥の北斗七星』からの一節による。1995年8月15日「9条連(憲法9条世界へ未来へ連絡会)」イベントで初演された。航空隊に属する鳥の夫婦。来たるべき山ガラスとの戦いに備えた一日の訓練を終えてからの二羽の祈り。空を飛び交うような、上昇していく旋律線。

1960年6月15日安保反対闘争での警官隊との衝突の際に亡くなった大学生・樺美智子の追悼記念集会がかつて毎年開かれていた。

花のうた（佐藤信）1967年の「6.15 記念集会 シュプレヒコール〜ゲバラが髭を剃る朝」で初演。いくつかの改編曲がある。今回の版では、同年10月ポリビアで射殺された革命家チェ・ゲバラの追憶として後奏にフォルクローレ風の旋律が奏される。

ものがたり（佐藤信）樺美智子没後十年の1970年につくられた。

わかれ（中野重治）「中野重治研究と講演の会」のため作曲されたうたの一曲、1993年に初演された。「したたりのように」という言葉をモチーフにしたかと思われる音型がピアノで繰り返される。

私は光をにぎっている（山村暮鳥 原詩 松平慎太郎 作詞）珍しい、というべきか、讚美歌集へも作品が提供されている。第三の讚美歌集として1976年に刊行された『ともにうたおう』に所収。創作と信仰とのあいだに苦悩した暮鳥のことばを元につくられた。

敗戦の子ども（林光）1989年 林光氏は、折々自分でもソングの歌詞を書いている。は子どもたちへの氏の語りがそのまま歌になったかのようだ。恥ずべき記憶とされたある出来事が、ポジティブな、しかも未来へ引き継がれるべき仕事として語られる。

うた（佐藤信）1982年、当時民主化運動のさなかにあったポーランドの自主管理労働組合「連帯」支援のためのコンサートのために書かれた曲。子守歌、「ローレイ」、「黒い花びら」（永六輔作詞 1959年）、「ワルシャワ労働歌」（鹿地亘作詞）成長と共に聞き覚えただろういくつかの「うた」の引用が過去への郷愁とともに歌われる…この佐藤信の詩の仕掛けを受け、林光も、楽曲中にある引用を用いている。1991年の『林光バースデーコンサート』アンコールでは出演者全員が、林光自身のピアノで合唱した。



富塚研二（とみづか・けんじ）

国立音楽大学卒業。声楽を矢輔和雄、宮永康男、須藤美衣子の各氏に師事。合唱、アンサンブル活動の他、舞踏家・美術家・詩人・俳優など他分野の表現者との共同作業を多数行う。またヴォイス・トレーナーとして声・言葉を扱う職業人を各地で指導。

2008年、2009年の「旭川≪雪の降る街を≫音楽祭」中田喜直記念コンクールにおいて、二年連続第二位金賞・内村直也賞受賞。2010年奏楽堂日本歌曲コンクール入選。

2008年宮城県仙台市で、また2010年、2011年、福島県郡山市と須賀川市でリサイタル開催。2011年東日本大震災後より、追悼企画、チャリティー演奏に毎年参加。

李達也監督：映画「GALAPAGOS」(2013)

劇団「娯楽天国」：創立30周年記念公演「娯楽天国の『お気に召すまま』」シェイクスピア原作／小倉昌之演出(2018)

劇団石るつ：「犀」イオネスコ作／境野修次演出(2018)、「悪童日記」アゴタ・クリストフ原作／境野修次演出(2019)

新国立劇場：演劇「あの出来事」デヴィッド・グレッグ作／谷岡健彦訳／瀬戸山美咲演出(2019)

西耕一（スリーシェルズ）企画「伊福部昭百年紀」「ヒーローコーラス」ほかのコンサートシリーズへ合唱、アンサンブルとして参加。



伊坪 淑子

フェリス女学院大学音楽学部ディプロマコース修了後、桐朋学園大学音楽学部ディプロマコース修了。その後パリのエコールノルマルに留学。パリのナポレオンが眠るアンヴァリッドの前の広場においてのコンサートはフランス全土で放映される。ベルリンフィル・クラリネット首席奏者フックス氏をはじめとする、国内外の奏者とも共演を重ねる。帰国後は主にフランス語の歌曲、オペラ等の演奏に取り組んでいたが、Alberto CUPIDO ,Luciana SERRA をはじめとする数々のイタリア人の著名な歌手のマスターコースの伴奏をする機会をきっかけに、特にイタリアオペラにおける詩のリズムや韻律の重要性を強く感じ、昨年二月にはイタリアのシエナにおいてオペラ台本研究者の第一人者である Luca BONOMI 氏の元で学ぶ。また数年前から14233行にも及ぶダンテの『神曲』原文読破にも取り組んでいる。

日本声楽家協会、二期会イタリアオペラ研究会ピアニスト、聖徳大学兼任講師